

フィリピンの活動報告「助産師 富田江里子さん講演会」を開催しました!!

平成25年7月18日（木）に助産師の富田江里子さんをお招きして、フィリピンの活動報告をしていただきました。当日は、助産師さんを始め、赤ちゃん、子どもたちを連れてお母さんも参加されました。

富田さんは、1997年からご主人の植林事業に付き添い、フィリピンで暮らしておられます。その中で、現地の貧しい母子が置かれる状況に2000年にバルナバクリニックを作り、現在もご活躍されています。

さいたま助産院との縁は、院長の娘さんが大学生の時に富田さんのクリニックにボランティアに行かれたことから始まります。その後、私たちができることをということで年に一度、子ども服や薬剤を送らせていただいております。

講演会では、フィリピンの現状と共にフィリピンの人たちのたくましさ、生きている実感に詰まったお話し、また日本の良い点、考えさせられる点が多々ありました。



<お産について>多くの人のお産が“日常の生活の一部”としてあるということ。陣痛が来ている時は動きが止まるが、それ以外は普通に洗濯をしたり、家事をしたり。面白いと思ったことは、“産婆さん”という人がちょっと気が強い人であり（もちろんそのくらいでないといざという時に対応できないということもあるそうですが）、産婆さんが思う時に生まれないと帰ってしまうこともあるそう。そこで、お産する本人・家族が産婆さんを接待（食事等を提供）して帰らないようにし“その時”が来たら対応してもらおうそうです。

<日本は“みな平等”という学習がされていること>病院へ運び込まれた際、日本では誰に対してもすぐに「いつからこの状態か」等、症状を確認され必要な対応されているが、フィリピンではまず「“お金”が払えるかどうか」ということが確認される。現代医療は、お金のある方にとっては有効に受けられるものであるが、お金の無い方にとっては、受けた医療行為に問題があっても何も言える状況ではないということでした。同じ“病院”“医療”といっても違いがあることを知り、その国の状況を見誤らないことの大切さを話されました。

た。

＜貧困＝かわいそう？＞食べ物の種類が少ないから、かわいそうかといえば、その国にはその国の伝統食があり、その食生活でその種族は先祖代々生きてきている。また、住居の状況も資金や廃材はがなくて壁が足りなかったり、2畳程度に4人という狭い中で生活していてもそれをどうとらえるか。この国の人には置かれた状況の中で工夫し、明るくたくましく生きている。自然災害や戦争などで突如、その状況が変わった時には支援が必要だがそのようなことがない場合には、今の状況で工夫をし、生きているのだそうです。

支援をする側の“必要だろう”“こうしたほうがより良いだろう”を基準に考えたり、自分の状況と比較して“かわいそうだ”と決めつけることは、その場で生きる人の可能性や本来必要とされる支援を見間違えることにつながるということを話されました。このことは、私たちの日常生活の中でも、自分の価値観だけで相手のことを考えてしまう、良かれと思って…ということと共通すると思いました。

まだまだ、たくさんのお話がありましたが、最後にマザーテレサさんの「愛情の反対は無関心」という事を話され、私たちが今できることとして家族を、周りを愛することを伝えることから始めてみて下さいと教えていただきました。

＜参加された方の感想＞

- ・「人が生きる」こと「死にゆく」こと…辛くても見つめ、考えていかなければならないと思います。私も私なりに考え、それを愛する子どもたちに伝え、子どもと共にまた考えていきたいと思います。
- ・「その土地でのお産」があるのが改めて考えさせられました。日本は日本の昔から伝わる「お産」があると思います。それを大切に助産師として伝えていきたいと感じました。
- ・自分の頭で考えること、なかなか難しいことですが忘れずにいきたいです。「人は人の愛情ある関わりで育つ」「よりよく生きる支援、よりよく死んでいく支援」たくさんのお話をありがとうございました。現場の人だからこそその言葉、真実を見抜く目を持ちたいと思いました。
- ・第1子を出産、はじめての子育てに悩み多き日々を送っておりましたが、世界的な視野を持ちながら、我が地域で“愛する”ことの大切さを深く考えさせられました。
- ・日常に追われて、ついつい自分の事ばかり考えてしまう自身を恥ずかしく思いました。無知であることは怖いことだと感じました。でも今日富田さんのお話をきっかけにまた見えてくる世界が広がりそうです。

最後に、さいたま助産院友の会では、毎年10月頃にフィリピンへの支援物資を募集しています。HP上で告知もしますので今後ご協力をよろしくお願い致します。

(文責：小林知子)